

に司法警察事務を掌るところの課ありて犯罪の檢舉民刑事の裁判を爲す抑清國各省に於ては知縣、知州、知府、道臺、按察使、巡撫、總督等皆裁判權を與へられ上級官衙は下級官衙の裁判を監督し其不當と認むるものは之を廢棄し更に自から裁判する權あり又重罪犯に至れば刑部審問の部に陳べしが如く更らに幾多の手續を経頗る鄭重を極む單に制度の上より觀れば甚だ完備し復た弊害を生ずべき餘地なきが如きも裏面に於ては種々なる情實行はれ其弊に勝へざるものあるなり今少しく其情形を陳ぶれば地方官は皆行政官を以て司法官を兼ね其多數は法文を解するの力無く僅かに幕友書吏等に頼りて事を辨ずるを以て自然に弊を生じ易し又犯罪檢舉の機關完全ならざるを以て地方の勢望家等の如きは如何なる罪を犯すも之を檢舉するものなく且賄賂公行し訴訟の勝敗罪の輕重は一に黃白の多寡に依りて決定す又裁判所の不取締なるや審問あるときは書吏衙役等蟬集して傍聽するのみならず普通人さへも亦出入し殆んど公開に等しく事件の漏洩を防ぐこと能はず又民間に訟師と稱するものあり人を誘ひて訴訟を起さしめ以て己れの懷を肥さんことを圖り且地方官衙の書吏等は原被兩造に向て需索百端或は脅嚇し或は欺騙し求めて鑒かず往々訴訟のために家産を蕩盡するものあるに至る其極や冤死するも亦訴訟を起さざるの風を成すに至る是れ全國裁判所の通弊なり然るに巡警廳は工巡局時代以來賄賂の弊を一掃し審問所の取締を嚴肅にし裁判官は能く其の事務に精勵し冤枉を洗雪し屈辱を伸理し頗る嚴明なりされば世人の之に信賴する事日に厚さを加へ近來は遠く他省

より來て此に出訴するものあるに至れり其風自ら他官衙にも化を及ぼし刑部其他の北京内の裁判所も之れに鑒みて漸く面目を改めんとするに至りしは清國司法事務の爲めに喜ぶべき現象なりとす今左に近時京外人民の起訴したる著明の二大案件の大要を掲ぐ之を一讀せば以て工巡局が如何に朝野の信賴を受け居るかを知るべく又以て清國司法制度の實況を知るを得べし
一家十二人を慘殺せられ婦人の身を以て三年の久しき知縣、知府、按察使、總督等の各衙門及都察院に轉訴し尙ほ冤を伸ぶる能はず竟に工巡局に出訴するに至りし事の大要左の如し

直隸省永平府撫寧縣民

被害者李芝の妻

出訴者

李馬氏

被害者李詔の妻

憤死者

李馬氏

李際昌の妻

被害者

李彭氏

李際昌の弟

被害者

李際唐

被害者

李際昌の長男

李超

同 次男

被害者

李芝

李際唐の子

被害者

李有頭

同

被害者

李鐵頭十五歳

同

被害者

李四頭十歳

李超の女

被害者

李平頭五歳

李芝の子

被害者

李大頭十歳

同

被害者

李桂頭七歳

同

被害者

李鎮成頭三歳

李際昌の一族

被害者

李蔭棠

同縣紳士順天舉人大桃知縣

加害者(主動人)

王維勤

王維勤の兄(本村會首)

加害者

王維恂

王維勤の長男(附生 北京八旗中學堂在勤)

王者瑞

同次男

王者政

同三男

王者賓

同

同

同

王維勤の一族(撫寧縣の捕役)

王奇

王奇の義子

楊榮五

此外數人略之

同

前記加害者及被害者等は皆同村人にして相互の間最初何等の怨恨なき者なりしが光緒二十五年七月大雨降り續き被害者李超の飼養するところの家豚その圍牆の崩壞に乗じて逃走す加害者王維勤之を見て惡意俄に動き折しも實兄王維恂の本村會首たるより同人に勸め李文才王煥章任義等の惡漢を語ひその豚を捕獲せしめて之を食ひ尙ほ李文才を遣はし李超の父李際昌の家に至り妄りに豚を放ちて田畑を踐み荒らさせしは不都合なれば罰金として錢五千吊(千吊は日本の約七十五圓に相當す)を出すべしと威嚇せしむ李際昌之を承諾せず李文才は傍に在りし李向榮李須等をして四千吊にて内濟するやう説き勧めしめ己の名刺を添附して李際昌は青苗會匪なりとして撫寧縣に訴へしむ縣衙門は乃ち李際昌を召喚し拷問杖六百を加へしかば一時悶絶せしも冷水を與へて蘇生せしめ身に刑具を施し獄舎に投ず是れより先き李超李芝等は禍の身に及ばんことを恐れて逃避し際昌の弟李際唐及妻李彭氏は縣衙門の所在地に至りて情況を探り始めて際昌の禁獄の身となれるを知りしかば兩人同地に留りて救助の策を講ず

此時李超の妻李馬氏は夫の飼養せし豚より事起り舅に災難を蒙らしめたるを憂ひ且李際唐李彭氏の兩人縣衙門に赴きてより音信無きを疑ひ自ら安んずる事能はず走つて王維勤の家に至り舅父李際昌を救ひ出さんと哀願す維勤之を允さざるのみならず反て李馬氏を辱しめんとせしかば李馬氏則ち維勤の邸内に於て自ら咽喉を切りて死す此事官に聞えんとせしとき仲裁するものあり王維勤より一千七百吊を出し李馬氏を弔はんことを申し込みしに李超等は未だ以て足れりとなさず李馬氏の爲めに維勤の家人をして喪服を着け幡を立て、葬を送らしめ且つ道側に節烈碑を建立すべしと要求す維勤已むことを得ず更に七百吊を支出し又石碑一座を購ひて李馬氏の墳墓に運ばし以て喪服を着け幡を立て、葬を送る事だけを免れたり此より李王の兩家仇怨相結びて解けず光緒二十七年一月の頃山海關外の票匪撫寧縣内に竄入せしかば時の知縣張某王維勤をして郷團兵を率ひ匪徒を掃討せしむ然るに反て屢々匪徒の爲めに撃退せられ匪徒の勢益々猖獗なるを以て張某は更に外國駐屯兵に依頼して共同勤匪に従事し維勤をして其糧食等の事を經理せしむ此時匪徒は已に抬營地方に來襲し維勤等の居村に接近せしかば李氏一家は悉く逃れて山中に潜伏せり維勤は外國兵の抬營に赴き票匪を撃つの報を聞き此機に乗じて李氏一家を殺戮し平生の怨に報せんと心密かに決する所あり一族の王和なるものを遣はし王維恂に書を送り李氏一家を殺害せんことを依頼し且曰く李氏一家は票匪に通ずる

が故に縣衙門にも告示あり之を殺戮するも毫も怕るゝに足らずと尙ほ己れの長男王者瑞に次男王者政三男王者賓等を歸村せしめ共に復讐に従はしむ維勤則ち者瑞、和等と各所に人を結び王奇、楊榮五、玉升、李順、李向榮、王喚章、任義、王廷訓、李向陽、李成頭、李文才、李保頭、李秋頭等數十人を得各銃を携へ王奇が家に集合し此家を根據地と定め散じて李氏一家を搜索す王升は山中より李芝を誑き出して王奇の門前に到りしとき王和は突然鋏を以て李芝に斬り附け王奇は刀を以て後頭部を斬り楊榮五等力を併せて之を殺す李向榮亦李超を捜し出して王奇の門前に到りしとき王和前の如く鋏を以て之を斬り楊榮五等相共に之を撲殺す李際唐は此くとも知らず村内の情況を探らんとて歸家せしかば李須之を門外に喚び出し拳銃を放ちて之を倒し王和等銃劔を以て刺殺せり山中に在りし李彭氏は李芝等の出て行きし後音信無きを疑ひ李芝の妻李馬氏及娘孫等を伴ひ歸家せしに尙李芝李超等の消息を得ず一族なる李和の家に赴き尋ねるに及び始めて其殺害せられたるを知り直ちに遁れ隠れたれども王者瑞、楊榮五等に發見せられ多數は捕獲せらる始めより一人山中に留まりたる李蔭棠も後李向榮に誑かれて歸途に就きしが途中怪むべし輩の凶器を携へ群り居るを見て怪みて立ち止まりしとき李向榮突然槍を突き出せしが中らず蔭棠反て之を奪ひて逃走せり王奇が家には外國旗を立て之を護符となし捕獲せる李氏一家の人は悉く此に監禁す或日王維勤王奇等と相議り悉く之を殺戮せんとせるに李馬氏(李芝の妻以下皆同じ)地に跪て憫を乞ひしも王維勤の歸り來りたるときに云へとて復

た省みず遂に李彭氏を北房へ拉し行き繩を以て縊殺し李馬氏をして往て其屍を見せしむ此時李馬氏は楊榮五等に向ひ泣て今迄に殺されたる人々の遺骸を埋葬することを許されんことを求めしに漸く李彭氏及李芝の死屍のみ櫃に收めて葬むること許さる後王維勤歸り來りたれば李馬氏は又童兒一人なりとも殘留して家系を存せんことを再三哀願したれども維勤は此れ會中の公事なれば己れ如何ともすること能はずとて聽かず維勤楊榮五の兩人刀を執り王者瑞王者政王者賓等は銃を王維勤は六連發銃を其餘各々凶器を持し李氏一家を殺害し後患を絶つべしとて先づ李有頭以下李四頭(十歳)李平頭(五歳)李大頭(十歳)李桂頭(七歳)李鎖成頭(三歳)等の幼年者を拉き出し繩を以て辮髪を念珠繫ぎとなし將に手を下さんとす李馬氏慟哭して又歎願す維勤省みず李馬氏をも併せて殺さんとす王奇曰く李馬氏は醜婦にして夫に愛せられず罵詈擲せられたる者なれば夫の爲めに復讐するが如きことなかるべし如かず此女一人を残して賣却せんにはと乃ち屋内に幽閉す而して李鐵頭(十五歳)をも何處よりか捜し出し悉く村外なる河邊沙灘地方に拉き行き繩を以て樹木に緊縛し一齊射殺す李桂頭(七歳)猶ほ少しく氣息あり楊榮五刀を奮つて腹部を突き通し死に至らしむ屍は皆沙中に埋む然るに翌日に至り李鎖成頭(三歳)は猶絶命せず沙中より這ひ出でたりと聞き維勤は人を遣はし之を殺さしめんとせしも流石に敢て往くものあらざりしかば自ら刀を提げ行き之を一刀に屠る維勤は衆に謀り李氏一家の田畑家財を悉く一味徒黨に分與し價值なき物件のみ縣衙門に送致し且つ王奇等をして村人

連名の上申書を捏造せしめ李氏一族は票匪なりと誣告し己れは縣城内へ引上げたり李蔭棠も此時捕へられ銃殺せらる王維勤は其後王奇と商議し李馬氏を村内李立なるものに賣りて妻となすことを定め明日愈々其家に送り込まんとしたる時李馬氏は刃物は悉く取り上げられ剩さへ王奇が妻に看守せられ自殺する術も無かりしが如何なる隙やありけん李馬氏は竊かに王奇が家を逃げ出て馳て撫寧縣衙門に赴き告訴せり此に於て知縣張某は李氏一家のものにして殺されざりし李竹葉李桂香(共に李際昌の女にして母の李彭氏等と共に捕獲せられしが未だ殺されざりしもの)の二人を召喚し立會の上驗屍を行ひしが李際唐の死骸を除くの外李超其他一同の屍は野獸に食はれて一も完全なるもの無く相貌判明せず李彭氏及李芝の屍骸は埋葬せられあるの故を以て張某は李竹葉等をして故らに驗屍を拒ませ遂に之を驗せず知縣は一面王維勤、王者瑞、楊榮五、王蟬頭、李桂頭、李向榮、王升、李須等を前後逮捕監禁するに王維勤は又王奇に策を授け李氏の財物中に自家の物品を混入せしめ且つ王維勤家の盜難届書を造りて縣衙門に差出さしめたり王者瑞乃ち釋されて歸り其他は此歳六月を以て知府衙門に廻送せられたり王者瑞は父維勤の罪を免かれしめんことを計り山海關に赴き英國領事某に依頼し永平府衙門に書狀を送り其援助を依頼せしめ又嘗て王維勤の再從兄弟なる王昌言が票匪の來侵を聞き其妻及次女の匪徒に辱められんとを恐れ毒を仰て自殺せしことを想起し王昌言に教唆し此れ皆李氏一家の者匪徒を率ひ來り鴉片を與へて殺害せるものなりと誣ひ屢々府衙門に告訴せしむ十二月王者瑞又蘆龍撫寧兩縣の紳董李富等に

委囑し連署を以て王維勤は人を殺すが如き惡人にあらざることを上申せしめ其保釋を謀る翌二十八年三月李馬氏は王維勤の既に永平府衙門の大官吏を悉く買収したることを聞き又府衙門より屢々誣告の擯斥を受くるを以て亡夫の妹婿(李竹葉の夫)董樹森及亡夫の從弟李功に依頼し北京に赴き訴訟を作製せしめ四月六日李功は都察院に出頭し控告す都察院は之を直隸按察使に該使は更に之を永平府衙門に下し審理を命じたるを以て李功は六月永平府に送還せられたり(清國に於ては誣告を防がんが爲め訴訟事件の大なるものは起訴者を拘留し置き被告人と對質せしむ)越えて九月に至り始めて委員王某なるものゝ取調べあり該委員曰く假令都察院に控告すとも同院は永平府の公事を管する能はずと又曰く王維勤は人を殺すが如き惡人にあらず李馬氏等は人を誣告するものなりとて拷問を行はんとせしかば李功大ひに恐怖し再び李馬氏の訴訟に關係せざるを誓ひて放還せらる爾來府衙門に於ては何等の取調べをもなさざる爲め李馬氏は又董樹森と俱に保定に赴き按察使衙門に上申したるに該衙門は永平府に命じ一ヶ月を限り終結せしむべしとて下げらる此時曹萬銀、李文才等は董樹森の李馬氏を助くるを見董樹森は人に訴訟を教唆するものなりとて永平府衙門に告發せしかば同府衙門は撫寧縣衙門に命じ期限を定め董樹森を捕獲せしむ此に因て董樹森も亦逃避するに至れり

是に於て李馬氏は獨り按察衙門に至り事由を上申し此案件を同衙門にて直接審判せられんことを請へり王維勤又之を聞き直ちに劃策する所あり即ち保定府知府朱某は其知友なるを以て書面を致し愈

按察使衙門に送らるゝ場合には格別の周旋を頼む旨申入れ猶ほ事後の報酬をも約せり光緒二十九年二月永平府衙門は王維勤等被告一同を按察使に送付す王維勤等送られて同衙門に至りしとき趙某なるものに銀四十兩を贈賄し維勤、者政等六人は保釋を許され楊榮五等五人のみ獄舎に投ぜらるゝ其後同衙門發審局員寧某何等の取調べありたるも永平府撫寧縣等の口供に就きて訊問せらるゝのみにて李馬氏と一回も對審せざりしかば維勤は此く委員の取扱の寛大なると且又到着の當日即ち保釋を許されたるは前に朱知府に送りし書面の效驗なるを知り同三月撫寧知縣張某公用の爲め省城（保定）に來りたるを幸ひとし自ら張某の寓所に至り保定府知府に維勤の無罪を保證し放免せらるゝ機幹旋を依囑せられたしと頼みしに張某之を諾し即ち王維勤は撫寧縣の勢望家にして自分より命じて郷團兵を指揮せしめし者なり且李有頭等被害の當時維勤は縣城内に在りて奔走盡力中なりしを以て何ぞ人を殺すの暇を得んとの書狀を認め之を朱知府に送りされど王維勤は李馬氏の尙ほ必ず其訴訟を貫徹せんとするを見て此は董樹森の教唆に出づるものとなし曹萬銀、李文才をして屢々按察使衙門に董樹森は著名なる訟師にして人を教唆する惡漢なりと訴へしむ因て寧某等は李馬氏を召喚し其保釋を解除し之を拘留せんとしたるも保證人の再三歎願するを以て尙ほ保釋を許され保證人に引渡されたり四月に至り按察使は候補知縣王某を派遣し撫寧縣に至り竊かに事件の實情を探偵せしむ之を聞きたる王維勤は己の罪惡の發覺を恐れ直に王某の寓所に伺候しその庇護を請ひ且つ事後の

報酬を約す因て王某は撫寧縣に於て取調の結果李際昌は家富めるに拘はらず強慾飽くことを知らず常に高利を貸し人を苦しめたり其子孫の絶えんとするは固より自業自得と云ふべく又王維勤は當時剿匪隊の糧食方を務めたれば家に歸り人を教唆するの暇なかりしとを聞取れる旨を復命す五月按察使衙門にては董樹森を捕へ清苑縣衙門に拘留す王維勤之を聞き又洋銀五十兩を同縣衙門雜役李某に與え密かに董樹森を虐待せしむ然れば董樹森は鐵鎖の苦と病苦とに依り將に監中に斃れんとす李馬氏之を憂ひ按察使に訴へ僅かに其の保釋を許されたり時に遷安縣民張韓氏及蕭洛四なるもの訴訟用の爲め保定に來り李馬氏と同宿し屢々往來す張韓氏の親戚羅心青なる者亦事に因りて保定に來り王維勤の知友傳盛泉と往來せしかば王維勤は傳盛泉を経て羅心青を語ひて更に蕭洛四に頼み之をして撫寧縣に赴きて李功を尋ねしめ利を以て彼に説き李馬氏は訴訟狂にして人を誣告する者なりとの證明を作らば若干の報酬を與ふべしと告げたるも李功より非常なる多額の報酬を要求せられて其計は行ふことを果さず更に羅心青に議り李馬氏を張韓氏の義女として他家に嫁せんとせしも李馬氏固く執りて従はず乃ち羅心青をして又董樹森に説かしめて曰く汝他に避けて復李馬氏の訴訟に關係せずば王維勤より銀五百兩を贈らん若し李馬氏を殺害し或は他所に連れ行き人に賣り渡さば銀一千五百兩を贈らんと董樹森聽かず因て羅心青をして李馬氏を欺き俱に上京告訴せんと云ひ同じく汽車に乗じ汽車進行中機を見て李馬氏を河中に陥れしめんと謀りしも流石に羅心青も之を諾せざりき十二月李

馬氏上京し都察院に上告せしが採用せられず同時王維勤父子共に保證人を立て家に歸るを許されしかば王維勤は撫寧縣衙門に至り現在知縣汝某に面晤し庇護を請ひ李馬氏若し訴訟を取下げざれば董樹森を拘留せられたしと要求す汝某之を諾す王維勤一面又侯永、李永恒等を仲裁人となし李際昌に王孝瑞の四女を以て李際昌の幼兒に嫁せしめ又李馬氏には養育料として四千五百吊を贈り以て事を終えんと申込みしに李際昌之を承諾せしかば李馬氏は已むを得ず陽に承諾を装ひ居りしが翌年正月直隸總督衙門に出訴せり然れども何時採用せらるゝやも期し難きを以て董樹森と共に上京せしに王維勤も亦李際昌及侯永等を伴ひ出京し李馬氏を尋ね出し示談を整へんとせしが李馬氏早くも三月十五日を以て工巡局に出訴したり是に於て同局は巡捕を派遣し王維勤等を捕縛し有職者は夫々先づ革職に處し管理工巡局事務大臣那桐氏は總監督航朗副監督張柳の二氏を遴派し發審處委員と會同し被告人の訊問に従ひ豫審終了し光緒三十年四月奏請し旨を奉じて被告等を刑部に引渡したり刑部は他の法司と會審議定し同年九月具奏旨を奉じて王維勤は凌遲死に處し王者瑞王奇楊榮五等は各斬に處し事全く落着す

他の一は大岡政談中の天一坊事件に酷似するものにして一浮浪あり光緒二十六年團匪騷亂の際皇族の徵證たる黃帶子を所持し飄然來て直隸省新城縣の某民家に寄寓し甘言巧辭を以て其女を姦估し竟に傲然として其土地財産を押領し黨與を集めて豺狼の慾を恣にせんとす民家の夫妻其虐待に堪へず

老幼を携へて逃避し縣衙門に告訴す知縣は其皇族たることを聞き畏怖して敢て之を審理せず更に知府に訴へたるも躊躇し敢て手を下さず乃ち空しく怨を吞み憤を含み徒らに神明の加護に祈るもの三歳偶々工巡局の裁判嚴明なるを聞知し光緒三十年十一月遠く上京して出訴せしかば同局は直ちに警巡巡捕を派遣して皇族と詐稱せる浮浪の徒及其黨與を逮捕し審理を経て刑部に送付し斬に處したり

四 順天府及大興宛平二縣

順天府は從來內城に於ける漢人のみの裁判を掌りしが現時に於ては内外城を問はず又旗人漢人の區別なく之が裁判を爲す事前記二衙門と異なることなし

府に發審局あり治中一人局務を綜理し委員六人裁判を掌る

府に捕盜營あり中營を外城に置き治中に隸屬し内外兩城に於ける犯罪者を逮捕す發審局は之が審問をなし笞杖は即決し徒刑以上の重罪は之を刑部に送る

府に同知四人あり通州、蘆溝橋、黃村及沙河に分駐し之に隸屬する南北東西捕盜營の逮捕せる犯罪者を裁判し輕罪は即決し重罪犯者は直隸按察使に送る

大興宛平兩縣は其所管地域内(内外兩城内を除く)に於ける裁判を掌り輕罪及民事訴訟は即決し徒刑以上の重罪は蘆溝橋同知を経て之を直隸按察使に送付す